

甲州街道の宿場町を巡る

「韭崎宿の今昔物語」

韭崎宿本陣の跡



韭崎市



1 一橋陣屋址

一橋家は田安家・清水家とともに徳川御三卿と称し、御三家に次ぐ將軍継承権を持つ家柄として、元文5年（1740）に8代將軍吉宗の第4子宗尹（むねただ）が江戸城内一橋門内に屋敷を与えられ、延享3年（1746）甲斐・武蔵・和泉国に10万石が与えられた。

甲斐国には巨摩郡を中心に3万石の領地があり、その陣屋（代官所）が宇津谷村妙善寺前に7年間置かれた。

陣屋は宝暦3年（1753）に河原部村（韮崎市=現在地）、更に寛政13年（1801）に遠江国相良村（静岡県相良町）に移された。一橋家からは家斉（いえなり）が11代將軍に、水戸家から養子に入った慶喜（よしのぶ）が15代將軍になっている



2 韮崎宿本陣の跡

甲府盆地の北西部に位置する韮崎市は、古くから甲斐と信濃を結ぶ要路で、峡北地方の要を占める要衝だった。慶長年代（1596～1614）甲州街道が官道として整備され、また、富士川の舟運が開かれると中世以来の穂阪路は廃れ、信州方面へのすべての道路が韮崎に集中し、峡北・信州方面の米麦、鰯沢から峡北・信州方面に送られる塩・海産物などがこの地を通過するようになって宿場が設けられ、交易の発達とともに商業的機能が增大し、政治的にも峡北地方の中心として繁栄した。

韮崎宿が繁忙を極めたのはお茶壺の通行、大名の通過、普請所巡検使の宿泊のときなどで、お茶壺の通行は寛永9年（1632）、三代將軍家光が將軍常用の宇治茶を江戸に送らせるのが始まりといわれ、享保8年（1723）に簡素化されるまで、その行列は諸大名の参勤交代をしのぎ、通過路の道路・橋梁は清掃、修繕され、前日には代官が出張見分するほどであったという。

本陣は問屋兼業だったが、門構え、玄関付、建坪およそ370㎡で、脇本陣はなく、大きい旅籠屋が脇本陣を兼ねていた。

3 馬つなぎ石

徳川家康は江戸城に入ると、主要道路の整備に着手、甲州街道も五街道の一つとして元和4年（1618）、官道になるにつれ韮崎は河原部宿駅（韮崎宿）として伝馬・中馬などで米穀・塩・海産物どの物資の集散地として人馬で混雑した。

そのため、各戸の表には自然石に穴をうがった高さ30～40cmの馬つなぎ石を設け、これに繋留した。



4 鰻沢横丁

鰻沢横丁は駿信往還（静岡方面への街道）の起点にあり、ここから「みのぶ道」と言われていた。

峡北地方（現在の中北地域）や諏訪・佐久地方の江戸城納めの年貢米を馬背に積んで、鰻沢河岸（幕末には船山河岸）まで運ぶ通行の道筋であった。

沿道には駄菓子屋・馬方茶屋などが軒を並べて賑わっていたが、明治36年の国鉄中央線の開通によって荷物輸送の経路が一変したことで、往時の活況が消え失せた。



韮崎に「鰻沢」がある？

山梨の地名で「鰻沢（かじかざわ）」と言えば、甲府盆地の南西端に位置する旧鰻沢町（現・富士川町）のことを思い浮かべるのが普通です。

鰻沢は、甲府盆地西部を流れる釜無川と東部を流れる笛吹川とが合流し、富士川と名前を変えるその発端の場所です。江戸時代は、富士川を行き来する水運の拠点となる河岸が築かれ、年貢米と塩を代表とする物流の大動脈として300年のあいだ重きをなしました。

ですが、この韮崎市にも「鰻沢」があることをご存じですか？

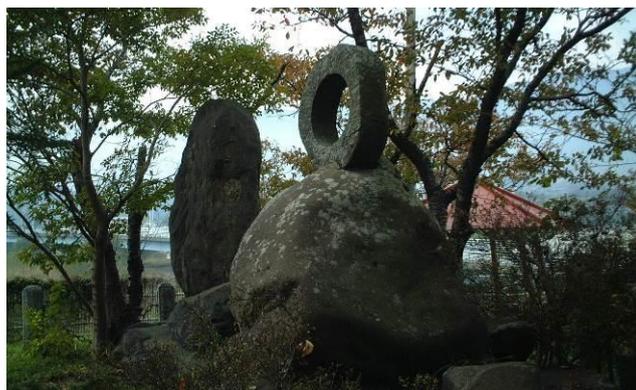
今の本町通り「下宿」交差点西側から国道20号線へ向かう小さな道…ここはかつて「鰻沢横丁」と呼ばれていました。鰻沢へ通じる街道＝すなわち駿信往還の起点であり、鰻沢河岸と行き来する舟がやってくる船山の船着き場へ向かう道でもあったからです。この小道は、水・陸ともに鰻沢との玄関口でした。さらに大きく言えば、鰻沢河岸を経由して海（駿河湾）と韮崎をつなぐスタート地点だったと言えます。

現在は、静かな住宅街の中の小道になっています。

5 船山河岸の碑

1607年（慶長12）、富士川が開削され、富士川舟運が始まってから230年近く後の1835年（天保6）、船山河岸が築かれ、韮崎が終点となった。

船山河岸ができたことで、鰻沢止まりだった富士川舟運は韮崎まで延長され、江戸城に納める年貢米や雑穀を「上げ米」し、塩や海産物を「下げ米」する近番船が往来し、交易がより盛んになった。宿の通りには、問屋や商店が立ち並び、農作物を売りに来る農民や、それらを求めて来る商人、さらには、馬に物資を乗せて信州へと運ぶ中馬稼ぎの姿も見られた。



6 鏡石

山岳信仰の一つの富士講を行った人たちによって、宝暦7年に舟山に設けられた石造物。高さ1.3mの台石の上に直径76cmの安山岩製のドーナツ型の鏡石が乗せられている。鏡石から霊峰富士山を遥拝して、講に弾みをつけて盛行したが、明治時代の終わりごろには衰退した。

葦崎宿は“ジャンクション”

現在の葦崎市本町通りは、江戸時代には甲州街道の宿場町でした。下諏訪（いまの長野県下諏訪町）と江戸の日本橋を結ぶ“幹線道路”沿いの町として、役人の通行や物流の拠点となりました。

葦崎宿の特色は、主要街道同士が交わる結節点ということです。甲州街道と、佐久往還（いまの北杜市須玉町から長野県佐久市岩村田へ通じる道）、駿信往還（いまの南アルプス市から富士川町を経て静岡県富士市へ通じる道）とが分岐する、いわば高速道路の“ジャンクション”でした。

この“葦崎宿ジャンクション”は、サービスエリアと物流センターの役目も兼ね備えていました。旅館や飲食店が軒を連ねるほか、米や塩・酒などの商店の前には、午前10時ともなると荷物を運ぶ馬が数百頭もごった返したそうです。

しかも、葦崎宿に隣接した船山には釜無川の舟着き場もありました。まさに「陸運と水運のジャンクション」でもあったと言えます。

葦崎宿の職業ランキング

明治8年（1875）「河原部村諸商業名目表取調書上簿」

馬稼ぎ	59名	乾物	9名
穀商	41名	太物	9名
馬宿	37名	附木※1	9名
塩	32名	酒造	8名
煮売り	27名	肴	8名
旅籠屋	24名	大工	8名
飴菓子小売	17名	葺師	8名
水車	14名	九六鋤※2	8名
質屋	12名	紺屋	7名
小荒物	12名	仕立織	7名
荒物	11名	鍛冶	7名
養蚕	10名	菓子	7名
いかだ	10名	荷担商	6名

※1 木の薄片に硫黄を塗った物。火種を移すときに使った。

※2 石積み等の土木工事に携わる。

葦崎の名物は米と塩？

葦崎宿（いまの葦崎市本町通り）は、北巨摩地域（いまの北杜市）で生産された米が集められる場所として栄えました。現在の国道20号線の船山橋北詰交差点あたりに舟着き場があり、そこで年貢米を舟に積み、鰍沢河岸（いまの富士川町富士橋付近）へ運ぶために米が集められたのでした。鰍沢は、甲州のみならず信州方面からの年貢米も集積される一大ターミナルだったのです。

では、米とならんで葦崎宿で最も多く扱われていた品とは何か…？意外にも、それは塩です。海から遠く離れた葦崎にたくさんの塩が集まったことには、やはり米が関係しています。

年貢米を積んで川を下って行った舟は、帰りには鰍沢で塩を載せて葦崎に戻ってきました。鰍沢河岸には、静岡方面からもたらされた塩も集積されていました。船山で荷下ろしされた塩は、馬に積み替えて北巨摩方面へ陸送されたほか、遠くは現在の長野県高遠市まで運ばれて行きました。



7 井筒屋醤油

醤油・味噌・麴の限りない未来に夢を託して
伝統の味と香りを、今、ここから・・・



山寺家は、200年以上前より韮崎の地で商売を営んでおり、江戸時代は雑貨商をしていた。

曾祖父が甲府市にある「井筒屋」（いまはない）というお茶屋で修業をして「暖簾分け」をしてもらい、明治6年（1873）から「井筒屋」という屋号を名乗っている。

明治初期、この地は「養蚕」が重要な産業で、「井筒屋」も製糸の卸業を本業にしていたが、大正時代に入り製糸の価格が暴落しはじめたのを機に、それまで副業としていた醤油、味噌の製造を本業として、現在に至っている。

現在、山梨県において醤油の製造元は2軒、味噌の製造元は数件に減少してしまったが、2013年12月、「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されたのを機に、「山梨から醸造の灯を消してはいけない」「日本の伝統的な食文化を守り、後世に繋げていくことこそ使命」と肝に銘じ、引き継がれてきた伝統の製法を守りながら、醤油・味噌・麴造りに励んでいる。

8 『布屋』中宿分家（小林一三が育った家：現存）

布屋本家当主小林七左衛門維周の三男維明こと小平治（一三の祖父）の家です。昭和の甲州街道の拡幅工事で表側を5メートルほど解体されましたが、唯一現存する布屋の建物で、下宿分家と同じ文政4年ごろに建てられた商家です。

妻を亡くした小平治は、長女幾久野と次女まつゑの三人で暮らしていましたが、慶応2年7月に小平治が亡くなると、幾久野は本家に引き取られ、まつゑは親戚の清水家の養女となります。そこで空き家となった中宿分家に本家三男の小六（後の韮崎町長）が入り、本家で成長して婿取りをした幾久野は下宿分家で新婚生活を始めます。

そして下宿分家で生まれた一三も、母親の死後に本家に引き取られました。

本家当主維百の妻房子は格式高い家風を守り、世間で評判の面倒見のよい人でした。一三は周囲の大人から「布屋のぼうさん」と敬われ、一三自身も自分は布屋の子どもだと思い込んでいましたが、10歳頃になると維百の長男七郎の子ども（女子）が成長し、その子から「あんたのおじいちゃん、おばあちゃんではないよ」と言われると、それが事実だと気付いてから「居候」を意識するようになります。本家に居場所をなくした一三は、学校帰りに毎日のように中宿分家に寄り、小六に与えられた部屋で読書や勉強をしていました。





葦崎宿（中宿）→

かつての葦崎本町通り。ライオンは
みがきの看板は中込文具店、左は八島
楼、その向こうは叶屋酒造店。

ハエは繁栄の証！

「葦崎宿名所名物品々」（文政9年／1826年）



並崎名所名物品々									
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小結	関脇	大関	大関
富士に眞白に残り 景勝地なり	農期の頃より鳥の 形に雪をゆる由	山より夕紅高き 硬石出する所なり	元日より大みそか迄 通行す	雪早くかりて よそくきゆるなり	秋参詣多し	土用を待つて東郡より 鶉つかひまる	春になり牛の形に消ゆる 松に積る雪	天文年中の開其松 三十三年に度用帳有 夕ぐれ観音山にあたり 明け六つに諸所の分ゆる	六月十五日雪消へ 又其の余に於るよし
鐘撞堂涼	農鳥山	鳳凰山	諏方仲馬	白根を嶽	地藏ヶ嶽	金無川の鮎	農牛	穴観音	裏富士
茅ヶ嶽	船山月見	金峯山	浅間山	邊見荷離	八つお嶽	鹽川の鰻	駒ヶ嶽	馬宿の蠅	牛馬の通行多き故なり

「関脇 牛馬の通行多き故なり 馬宿の蠅」

江戸時代後期の文政9年（1826）に発行された「葦崎宿名所名物品々」という番付表を見ると、なんとハエが関脇にランクイン！大関の「裏富士」「穴観音」（雲岩寺）に次いで、ハエが葦崎の名物として認識されていたのです。ちょっとショック…？でも、それこそが葦崎の繁栄の証なのです。番付表には「牛馬の通行多き故なり 馬宿の蠅」と書かれています。つまり、交通の要所として荷物を運ぶ馬や牛が多く行き交い、そのフンにハエが集まったということ！ “♪葦崎宿は馬糞宿 雨が降れば馬糞の水で飯を炊く♪” という民謡「葦崎節」に、まさにその様子が歌われています。明治15年（1882）生まれの方の回顧談によると、朝10時頃には巡査が宿場の交通整理に出て、近隣の村からは馬フンを拾う人々がやって来たそうです。馬フンは肥料になったため、集めて農家に売ったのです。

9 清水屋旅館

弘化2年（1845）開業 葦崎宿の旅人御宿

清水屋は甲州街道葦崎宿で、初代清水代右衛門が弘化2年に創業した旅館である。

当初は旅籠と練油業を営んでいたが、明治42年に3代目鯉鮒七の弟、金七の分家に伴い練油業（現在の(株)シミズヤセミセルフ葦崎SS）を分業している。

観光地要素が現在ほどではなかった当時、平常における利用者は商人の利用がほとんどであったが、徴兵検査や製糸女工募集の際は相当の賑わいがあったとされている。

現在は8代目の清水力徳さんが若旦那として旅館を運営し、奥さんの雅美さんとともに、葦崎で過ごす時間を楽しんでもらうためのさまざまな工夫をしている。



← 葦崎町制60周年祭

昭和26年10月5日の葦崎町制60周年記念式、翌6日の大名行列、仮装行列、移動演芸会、さらには7日の大名行列（続き）、底抜け山車など、3日間にわたって行われた。

写真は諏訪市から招いた大名行列。



葦崎市制10周年祭→

昭和39年、葦崎市商工会は葦崎市制10周年を記念して祝賀行事を展開したが、呼び物は「ミス葦崎コンテスト」であった。コンテストは葦崎ニューパール劇場（当時の映画館）で行われ、ミス葦崎、準ミス葦崎が選ばれ、入賞者は市内をパレードした。



昭和の本町通り（中宿）





10 上宿『布屋』本家跡（小林一三が育てられた家） （現在のいらさき文化村）

江戸末期の『布屋』本家は、酒造業、絹問屋、製糸業、質屋などを営み、多くの奉公人が働いていました。家名は布七で知られ、名主や長百姓を勤め、多額の金品を上納した貢献から1858（安政5）に名字御免を許されました。家紋は橘。家訓は『三界唯一心』。

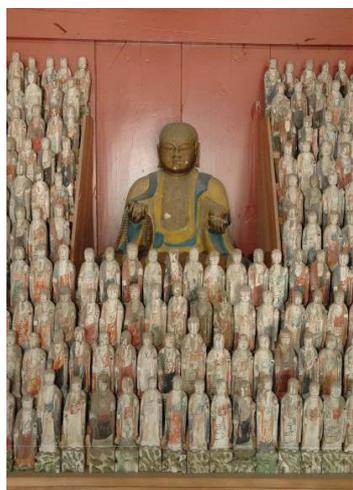


超大店であった店は甲州街道沿いにあり、間口16間（約29m）。1968（昭和43）年に「宝塚ファミリーランド」への移築解体工事が行われ、現在跡地は『いらさき文化村』という公園になっています。移築解体工事は7月10日に着工され、8月15日に工事が完了しました。宝塚では9月中に基礎工事が完了し、10月から組立工事が始まりました。完成は一三没後12年目の昭和44年2月。その際、早稲田大学が図面を起こしました。しかし、平成7年1月の阪神・淡路大震災で崩壊し、その後に「宝塚ファミリーランド」も閉園となりました。江戸期は地域のまとめ役で、住民の娯楽、公共施設や橋の建設、河川や道路や水路の整備などに資金を出しました。その際、工事には生活困窮者を優先的に雇い、さらに土地を多く所有していたことから、低所得者には無料同然に貸与していました。そのため住民の人望を集め、「子育てに困ったら、布屋さんの軒に子どもを置けば何とかしてくれる」といった話も広がりました。

11 雲岸寺（窟観音）

韮崎市の七里岩末端の急がいの下にある寺院で、室町時代の寛正5年、祖慶和尚が開基したものである。

はじめは真言の道場であったが、江戸時代のはじめ元和元年、天越和尚によって曹洞宗に改宗されたことから天越和尚を開山としている。境内の窟観音は有名で、空海が観音石仏を洞くつに安置し、住民が観音のために堂をたてたといわれ、寛文7年から千体仏を備えて翌年開眼したと伝えられている。通称穴観音として知られ、毎年3月の春分の日を大祭として2日間行われる例祭は参詣者で賑わっている。



地蔵信仰について（千体地蔵尊）

約1000年以上昔、釈迦牟尼仏滅後 弥勒菩薩出現までの間 現世の苦しみから逃げられぬ人間の願いを忍受する大慈大悲がにじみでる民間信仰として崇拝される地蔵講、地蔵参り、厄除け参り等が庶民の生活に必須の位置を占めるようになった。韮崎宿の日限地蔵尊は、江戸時代、釜無川に大水が出た時、上流から現在の船山橋あたりに流れ着いた。地区住民の協力のもと雲岸寺境内に安置し、靈験あらたかな地蔵尊として信仰の中心となる。時間を決めて祈願かける信者、日数を決めて祈願する信者、夜参りをする信者等、各自で信仰を決めて祈願し、願いごとがかなった際は 地蔵衣、祈願掛、祈願旗等を贈ってお礼をする習慣がある。

必ず一体は参詣祈願者の目と目が合う千体仏があると信仰され、これが祈願千体仏の心であると信仰祈願されてきた。現在では、『合格祈願』、『学業成就祈願』、『子宝祈願』、『安産祈願』、『健康祈願』、『良縁祈願』、『商売繁昌祈願』、『病氣平癒祈願』、『心願成就祈願』等の諸祈願成就霊場として信仰祈願されている。



恵比寿講（11月20日）

恵比寿は七福神の一人で商神の色が濃く、恵比寿を祭る祭事と同様、商店の売り出しも恵比寿講というようになった。

かつては商店が得意先に魚などを贈った。農家でも赤飯を炊き、ありったけの金を一升枥に入れて恵比寿様に供えた。

12 道標

側面 元禄八乙亥年八月 日

裏面 路頭石

左 信州すわ上みち

右 信州さく郡のみち

もとは葦崎宿の甲州街道と

佐久往還の分岐点（いまの「本町」交差点）に立っていたもので、昭和四十七年（1972）の札幌冬季オリンピックの際は、東京からやって来た聖火をここで二つに分け、一つは佐久往還を通過して佐久へ、もう一つは甲州街道を通過して諏訪を目指し、以後二つのルートで札幌を目指していったという逸話もある。



「のこぎりの歯」のような街並み

本町通りの街並みは、道路に対して並行ではなく、家々が南に向かって建てられている。（道路との角度が西側は11度位、東側は3～4度位）。「各地から集まってくる多量の荷物（とくに米の集積が多かった）を家の前に積む空地を設ける必要があった」「冬になると甲州名物からっ風といわれる強い北風が吹き、馬糞やほこりが家の奥に入り込むため、南に家を傾けた」「戦乱の時代に市街地での攻防を考えて建築された」など、いくつかの説があるが、いずれの言い伝えもはっきりとした根拠はない。



平和観音

昭和33年、駅前通りで菓子商（屋号：秋月）を営む故・秋山源太郎氏（当時49歳）が「葦崎市に観光的施設がないことと、平和な明るいまちをつくるため、何か一つのシンボルを市内のどこからでも眺められる場所につくりたい」と念願したのが始まり。

昭和34年4月の皇太子殿下ご成婚を記念するとともに、市民の平和と登山者の安全無事を祈願し、七里岩南端の市内を一望できる場所に、霊峰富士に向かう立像として、3年の歳月を要して、昭和36年に建立（昭和36年10月13日、台風災害の復興記念祭を兼ねて開眼除幕式が行われた）された。建設途中に伊勢湾台風による釜無川の氾濫により、この地方が大きな災害を被り、せっかく築いた土台とヤ

グラを壊されるなど一時工事が中断したが、2度と災害を受けぬようにとの観音像建立の声も高まり、昭和35年7月の再開を経て完成した。昭和50年2月、葦崎市に寄付採納。高崎白衣観音、大船観音の観音像と合わせ、関東三観音の一つと言われ、柔和な顔に乳房が若干大きいのが特徴である。

原型製作者：渡部星村（日本彫刻会仏像作家＝山形県朝日村生まれ・現鶴岡市）

高さ：16.6m（台座を加えると18.3m） お顔：2.6m

総工費：約300万円（当時の金額・自主的に製作にあたり経費を節減）

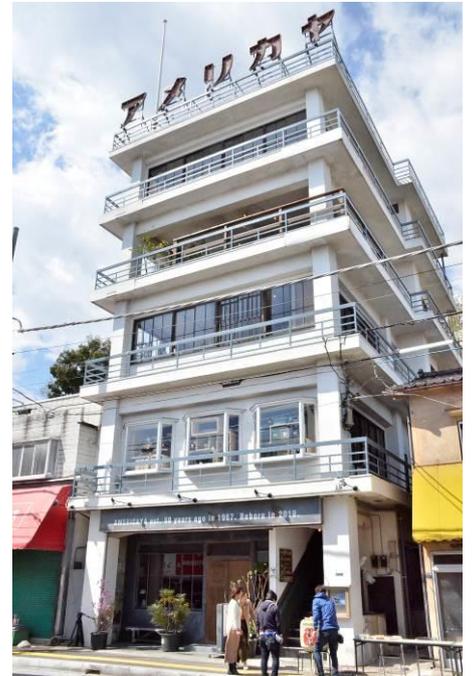
総重量：305t／使用したセメント：約2000袋

13 アメリカヤ・アメリカヤ横丁

韮崎市のランドマーク 復活！

かつて韮崎市のランドマークでもあったアメリカヤビルは、1967年に誕生した。鉄筋コンクリートの5階建てで、延べ約500平方メートルの建物で、当時は大きいビルが周りになく、特別目立つ建物だった。当時のアメリカヤビルは、1階が食堂やお土産、アイスクャンディ売り場、2階が喫茶店。3階は、住居スペース。4階から5階までは旅館として使われていたが、創業者の星野貢さんが亡くなり、アメリカヤの営業が一旦幕を閉じた。

約15年前から廃墟となっていた「アメリカヤ」が、外見は当時のままに、内部をリノベーションして2018年4月8日に復活した。



新たな新名所『アメリカヤ横丁』

韮崎中央商店街の『アメリカヤ』の15年ぶりの復活から約1年半が経った2019年9月7日、アメリカヤ向かいの路地裏にオープン。築70年の長屋をリノベーションした昭和感たっぷりの「アメリカヤ横丁」。

長屋のレトロな雰囲気そのまま生かされ、提灯やむき出しの電球に照らされた屋外スペースで乾杯することができるという、まさに昭和にタイムスリップしたかのような場所である。



14 学問の道～梅天神



天文10年（1541）、武田家に家督相続の内紛があり、晴信が家督を継ぐと諸侯のなかに不満を抱くものが現れた。その虚に乗じて積年の恨みを抱く、信州の諏訪頼茂、小笠原長時の連合軍が甲斐に侵入し、韮崎辺一帯において甲州軍と戦を交えた。

この韮崎合戦のころ、天神の祠の脇に梅の大木があって、戦時中は武田の軍旗をこれに揚げ、敵陣攻撃の重要な拠点となり、大勝利の因をなしたと言い伝えられている。このため、附近には旗田、殿田、大坪などの地名

が残っている。天神町の名はこの陣場天神の由緒から名付けられ、梅天神の名はこの梅の古木にちなんで名付けられたとも伝えられている。祭神名は菅原道真公で、梅天神のある通りを学問の道と呼んでいる。



15 蔵前院



宗派は禅宗である曹洞宗。本尊は虚空蔵菩薩で、「虚空のごとく廣大無辺なる功德の庫蔵を有するもの」つまり、宇宙のように廣大無辺な法宝を持ち、それを出して一切の衆生を利益すると言われている。また、蔵前院の本尊の両側には、地藏菩薩と観音菩薩も祀られている。

山号は向富山（こうふざん）で、これは富士山と相對していること、また「富に向かう山」という縁起の良い山号であることから「向富山」と号したそうである。

蔵前院の発祥は、17世紀初頭にさかのぼる。蔵前院は、もと下條村蔵之前にあった真言宗地藏院と呼ばれた小寺院だった。江戸時代に入り、甲州街道が江戸から甲府を経て下諏訪に通じると、葦崎町の前身である河原部村に葦崎宿が設けられた。この時、河原部村の長であった百姓の平賀源五左衛門は、葦崎宿の発展と宿民の精神安定のために、宿場葦崎に寺院を設けようと考え、そこで、地藏院の本尊を移すと同時に、甲府市にある長松山恵運院の名僧環室玄尊大和尚を開山に請じて向富山蔵前院が開かれた。

伽藍の整備には長い年月を要したらしく、平賀家の記録では寛永7（1630）年には本堂・庫裏・死霊堂などが完備したと言われている。その後、事情は明らかではないが、虚空蔵菩薩が本尊に迎えられ、地藏菩薩は合祀仏として祀られるようになった。そして、葦崎宿が発展するに従って大寺院になり、現在の蔵前院になったようである。現在の伽藍は平成16年に整備された。

『布屋』菩提寺（ここで小学校入学）・・・

明治11年（1878年）、5歳になった一三は小学葦崎学校下等小学第8級に入学。明治13年に新しく公立小学葦崎学校が建設されるまでの2年間、この寺で勉強した。

慶應2年（1866年）に一三の祖父小平治が亡くなった際は、この寺で12名の僧侶による荘厳な葬儀が行われた。当時の『布屋』の力が窺える。

本資料中、小林一三翁に関する記述は、逸翁・耳庵研究所代表 向山建生氏作成の「故郷の偉人 小林一三の少年期の足跡を辿る」を参考にしています。

本資料には著作権がついていますので、著作者に無断で複写や転用はできません。

蕪崎宿に関わる年表

西暦	和暦	日本幕府・将軍	できごと
822年	弘仁13年		
828年	天長 5年	平安初期	空海（弘法大師）が京都にて綜芸種智院設立
1464年	寛正 5年	室町初期	応仁の乱が起き、戦国時代に突入する
17世紀初頭			
1615年	元和 元年	徳川幕府2代将軍秀忠	
1640年 ～1645年		3代将軍家光	
1646年	正保 3年		お茶壺 蕪崎より府中まで送り人馬の割付
1667年	寛文 7年	4代将軍家綱	東大寺二月堂失火により焼失
1716年	享保 元年	8代将軍吉宗	享保の改革 大岡忠相南町奉行所
1730年後半			
1746年	延享 3年		
1753年	宝暦 3年	9代将軍家重	
1764年	明和 元年	10代将軍家治（吉宗の孫）	一橋家2代治済（はるさだ）が当主となる
1765年	明和 2年		
1767年	明和 4年		田沼意次 側用人となる
1768年			
・・・			
1783年 ～1788年			天明の大飢饉
1784年	天明 4年		
1787年	天明 7年	松平定信 老中筆頭	寛政の改革
1792年	寛政 4年		ロシア使節ラクスマン 蝦夷地根室に来航
1794年	寛政 6年	11代将軍家斉（いえなり）：一橋治済（はるさだ）の長男	
1798年	寛政10年		本居宣長が「古事記伝」を完成させる
1835年	天和 6年		
1845年	弘化 2年		
1870年	明治 3年		
1872年	明治 5年		
1873年	明治 6年		

葦崎宿に関わる年表

葦崎に関わること	備考
嵯峨天皇の勅命で宇佐八幡宮を勧請して武田の地に鎮座。武田八幡宮の始まり	
空海（弘法大師）が観音石仏を洞窟に安置する（窟観音）	民衆が観音のために窟堂を建てる
祖慶和尚が真言宗道場として雲岸寺を開く	
河原部村（現葦崎市）の長であった百姓の平賀源五左衛門は、葦崎宿の発展と宿民の精神安定のために、宿場葦崎に寺院を設けようと考え、藤井蔵以前の地藏院本尊を移すと同時に、甲府市にある長松山恵運院の名僧環室玄尊大和尚を開山に請じて向富山蔵前院を開山した。伽藍の整備には長い年月を要し、平賀家の記録では寛永7年（1630）に本堂、庫裏、死霊堂などが完備したとされている。	
蔵前院2世天城和尚が雲岸寺を曹洞宗として開山 高家村高360石8合で当宿馬次となる	
上町、中町、下町の3街村 伝馬宿は岩下村で扱われ、その後、新道路が直接葦崎宿に結ばれ、近郷の人々が移住して葦崎宿が成立した。	
葦崎宿問屋岩下が対応	
洞窟観音千体仏が安置される	
河原部（船山）河岸の記述あり	
一橋家が誕生。吉宗4男宗尹（むねただ）が甲斐に領地をもつ	領地10万石のうち3万石余りは宇津谷（陣屋）
御三卿（ごさんきょう） 田安德川家（田安家） 始祖は徳川宗武（8代将軍吉宗の次男）／一橋徳川家（一橋家） 始祖は徳川宗尹（8代将軍吉宗の4男）／清水徳川家（清水家） 始祖は徳川重好（9代将軍家重の次男）	
一橋陣屋が河原部村（現葦崎市）に移築される（東西33メートル・南北52メートル） 8／16 信州高遠城主内藤大和守が通過、本陣が作られる	
信州高島城主 諏訪安芸守 通過	
信州飯田城主 堀大和守 通過	
	1779年、家治の長男家基が18歳で死去
信州松代城主 真田伊豆守 通過	
	田安德川家の初代当主 徳川宗武の7男
陣屋が廃止され幕府領になる	
河原部（船山）河岸より御廻米の積み出し	
船山河岸の開設	
清水屋旅館開業	
百瀬荘資郎が火災にあって荒れ果てていた雲岸寺に本堂を寄進	
1月3日、小林一三が生まれる 井筒屋 のれん分けを受け開業	



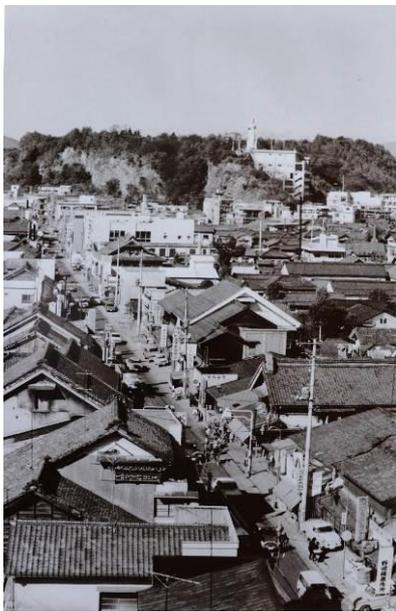
昔の葦崎駅



昔の葦崎警察署



寿座



下宿～中宿（昭和43年ごろ）



東京オリンピック聖火リレー（昭和39年）

韮崎市の主な観光スポット

■わに塚のサクラ

春うららかな田園に咲き誇る孤高の一本桜



田園地帯の中のこんもりと盛り上がった塚の上に立つ樹齢約330年のエドヒガンザクラ。わに塚の名前の由来は、日本武尊の王子「武田王」の墓と言われることや塚の形が鰐口（仏具の一種）に似ているからなど、諸説があります。残雪の富士山や八ヶ岳を背景に咲き誇る姿は、凛とした美しさで、訪れる人々を魅了します。見ごろの時期にはライトアップが行われ、幻想的な姿も楽しめます！（平成元年 市指定文化財）

■新府桃源郷

のどかな農村風景を彩るピンク色の絨毯

七里岩の台地に広がる新府桃源郷は、4月上旬から中旬にかけて満開を迎えます。約60haの桃畑に広がる桃の花の「ピンク」と空の「青」、菜の花の「黄色」といったパステルカラーのコントラストは、写真映え間違いなしのスポットです！



■茅ヶ岳

日本百名山の著者 深田久弥終焉の地



手ごろなハイキングコースとして人気の山。山頂からは富士山や南アルプス、金峰山をはじめとする奥秩父の山々など、360度景色を楽しむことができます。また「日本百名山」の著書 深田久弥終焉の地としても知られ、毎年4月には氏の遺徳を偲ぶ「深田祭」が開かれます。

■甘利山

富士山と甲府盆地を望める絶景スポット！



南アルプスユネスコエコパークの緩衝地域に位置し、山梨百名山の一つでもある甘利山は、駐車場から山頂まで徒歩30分！誰でも気軽に登れる山として親しまれています。条件次第では、山頂から富士山や雲海、きれいな星空と甲府盆地の夜景を眺めることができます。6月上旬から中旬にかけては、約15万株のレンゲツツジが山頂一帯を真紅に染めます。

■韮崎大村美術館

ノーベル生理学・医学賞受賞の大村智博士が蒐集した、女性美術家による作品や日本の民藝運動を伝える陶磁器作品を軸に展示しています。



■武田八幡宮

武田ファン必見！甲斐武田家 発祥の神社

令和4年に創建1200年を迎える古い歴史をもつ甲斐武田家の氏神。

この地で、甲斐源氏の流れをくむ新羅三郎義光のひ孫龍光丸が元服、武田太郎信義を名乗り、甲斐武田家が発祥しました。

三間社流造檜皮葺の本殿は、信玄公によって再建されました。雄大で装飾的意匠に優れた室町時代の特色を示し、武田家興隆期の力強さを誇っており、国指定重要文化財に指定されています。

韮崎市のパワースポットとしても有名です！



■願成寺

甲斐武田家の菩提所



甲斐武田家の祖、信義公の菩提所で、信義公のお墓との伝承を持つ五輪塔や後白河法皇が命名した「鳳凰山」の山号額があります。木造阿弥陀如来及び両脇侍像は国の重要文化財に指定されています。

■阿弥陀三尊像の拝観は要予約

☎0551-22-3118



■韮崎市のパワースポット

作家で画家、波動セラピストのキャメレオン竹田が選定

■銀河鉄道展望公園

富士山、南アルプス、韮崎市内を一望できる小さな展望公園です。

夜になると七里岩を通るJR中央本線の電車の灯りが、一筋の銀河鉄道のように見えることから、この名前がつけました。



■穂見神社

石鳥居の前の小川には小さなアーチ形の石橋があり、また拝殿の奥に鎮座する本殿には見事な彫刻が見られます。本殿脇にある遊歩道を登ると

「根の神石」と言われる巨霊石があり、御神木として祀られています。



■大賀ハス

2000年以上前の青泥層の地層から見つかったハスの種子を大賀一郎博士が育て開花させたハスです。

穴山町の医師、故 島津壽秀先生が千葉市（大賀ハスは千葉県の天然記念物）の厚意により特別に譲り受けたハスを丹精込めて育てあげました。

7月中旬には約500株の大賀ハスが満開を迎えます。



■當麻戸神社

「藤井平五千石」と呼ばれる田園地帯のなかに、石の鳥居と赤い鳥居が並んでいるのが目印。広島

の厳島神社と長野の戸隠神社とならぶ「日本三か所鳥飼い霊場」と言われています。鳥が置いた場所によって豊年か凶年かを占い、五穀豊穡を祈願する「鳥飼いの神事」が行われていました。



キャメレオン竹田プロフィール

作家、画家、実業家。
(株)トウメイ人間製作所代表取締役。

「自分の波動を整えて、開運していくコツ」を日々、研究し、国内外のパワースポット・聖地を巡って、受信したメッセージを伝えることがライフワーク。



■わに塚のサクラ

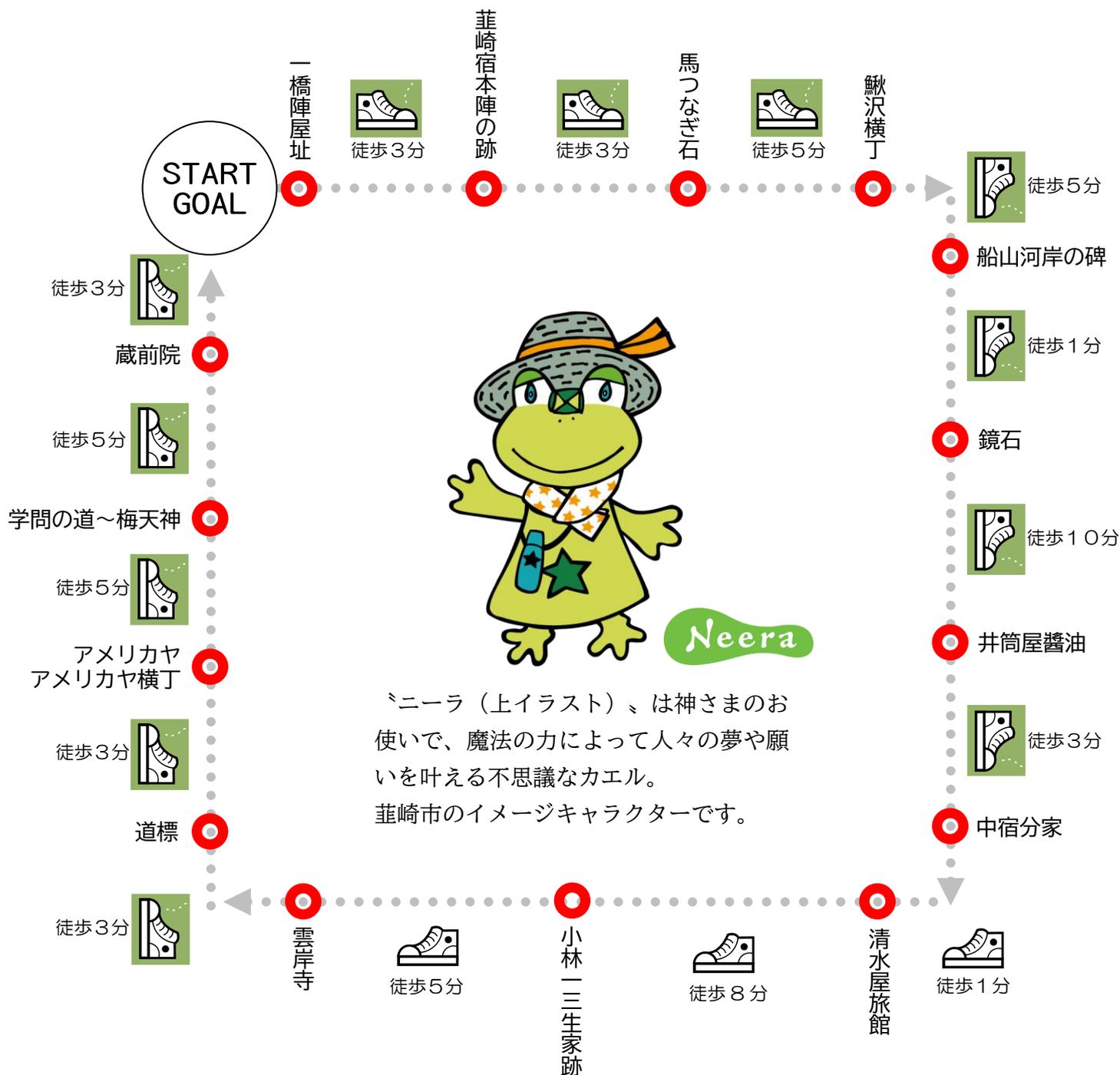
詳細はP17に記載



■武田八幡宮

詳細は上記に記載





上記に記載のコースは、「甲州街道葦崎宿の今昔物語」の基本的なコースです。
 希望される滞在時間（ツアーにかけられる時間）やスポット（特に重点的に見たい場所）、
 また、担当する地域ガイドの意向等により、変更となる場合もあります。



一般社団法人 葦崎市観光協会

〒407-8501 山梨県葦崎市水神1-3-1

TEL 0551-22-1991

URL <https://www.nirasaki-kankou.jp/>

